

開催地名：愛知県大治町	
開催日時	令和2年2月7日（金） 14：00～15：30
開催場所	大治町役場
語り部	菊池 保夫（岩手県遠野市）
参加者	大治町役場職員、大治町社会福祉協議会職員 約50名
開催経緯	当町では近年大きな災害が起こっておらず、職員の防災意識の低下が懸念されている。東日本大震災を経験された語り部から、発災時の行政職員としての体験談や教訓について、そして避難所運営の体験談や教訓についての話を伺い、今後の防災活動の糧としたい。
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>遠野市では、宮城県沖地震を想定し、後方支援拠点構想を立ち上げて、訓練を行ってきた。既存のものに新たな役割を追加するため、面積が29ヘクタールある総合運動公園を駐車場やヘリポートにしたり、自衛隊のテントを張ったりできるようにした。周辺の水田も、鉄板を敷けばヘリポートになる。県や国にも、同構想をもとにした訓練の実施を働きかけ、大きな訓練を行った。この訓練が東日本大震災に生かされたと思う。訓練には市の職員はもちろん、市民も参加しており、いざ津波災害が起きたときは、遠野市は後方支援の役割を果たすということを市民も理解していた。この2点が実際の展開も初動の動きもスムーズにいった点だと思う。</p> <p>（2）東日本大震災発生と後方支援活動</p> <p>地震発生後、日没前の16時30分には、市内の被害状況を把握することができた。幸いにして市内での家屋倒壊、火災はなく、死者・重傷者はいなかったが、停電、断水は数日続いた。また、市役所の本庁舎が全壊してしまい、駐車場にテントを設営して活動を開始した。</p> <p>12日未明（1時40分）に大槌町から2つの峠を越えて一人の男性が本部テントに駆け込んできた。大槌町では大槌高校に500人が避難しており、水も食料も何もない状態のため、すぐに助けてほしいということだった。夜明けを待って職員が物資を積んで大槌町に向かった。帰ってきた職員からの第一声は「言葉になりません」であった。</p> <p>大槌町への支援の後、沿岸の釜石市、大船渡市、陸前高田市、山田町に対しても支援を拡大していった。職員は物資が不足する中、市内のスーパーの倉庫から必要な物品を買占め、必要なところへ供給した。購入した物資、備蓄品は合計で約4,000～5,000万円にのぼった。また、被災地では物資の仕分けなどもままならないため、被災者が自由に必要なものを持っていけるシステムの物資センターを設置し、運営した。その他、支援隊の受け入れ、被災地への物資搬出、おに</p>

ぎり隊の運営、ボランティア団体の宿泊場所調整、がれき撤去、保健師の派遣、文化財レスキュー等の後方支援活動を、役割・担当の枠を越えて、その場の判断で対応していった。

4月6日までの26日間、全職員による集会を朝7時と夜8時に行い、情報の共有に努めた。さらに、この動きは市民にも広がり、被災者のために官民一体となった後方支援活動として展開された。これらの活動が可能だったのは、①速やかな市内の被害状況の把握、②市民の理解、③後方支援構想に基づく実践だったことに拠ると思う。

### (3) 避難所運営の取組

第一に、生活の場としての環境の確保が必要である。そのためには、プライバシーの確保、高齢者や障害者、乳幼児への配慮、衛生面の対策、防犯対策が必要になる。また、食事の際にはアレルギーへの配慮も必要になる。避難生活が長期にわたる場合は、これらを踏まえ、総務、情報連絡、物資配分、衛生、安全点検等に業務を分担した住民による運営組織を設置することが必要である。なお、避難所では女性の視点は極めて有効なので、運営リーダーには女性にも入っていただく必要があると思う。

また、自助、共助、公助において、公助はあてにしてはならない。役所に市民の声は届きにくい。個人情報保護法は、情報の収集、発信の妨げとなったことも申し添えておく。最後に、防災行政も大切であるが、地域の祭り、社会教育、生涯学習等、各地域での日頃の活動の大切さを痛感した。



開催地より

東日本大震災時の遠野市の後方支援活動についてわかりやすくお話していただいた。また、避難所運営についても、参考になるポイントを伺うことができた。職員一同、今後の防災活動に活かしていきたいと思う。